

Title	猫に小判
Author(s)	中村, 忠
Citation	一橋大学社会科学古典資料センター年報, 10: 3-5
Issue Date	1990-03-31
Type	Departmental Bulletin Paper
Text Version	publisher
URL	http://doi.org/10.15057/5507
Right	

猫に小判 Pearls before Swine

中 村 忠
NAKAMURA Tadashi

私はしょっちゅう社会科学古典資料センターのわきを行き来している。私の研究室は磯野研究館にあるし、文献のコピーなどを頼む商学研究室は第2研究館にあるからだ。しかし「センター」の中に入ったのは、いままでに3回か4回しかない。それほどに私は「センター」と縁が薄いのである。

にもかかわらずこの年報に寄稿するのはなぜか。直接的には「センター」の併任教授である古賀英三郎氏に頼まれたからであるが、そのもとになったのは経済研究所の津田内匠教授である。

津田さんが経済研究所長るとき、附属図書館長が森田哲彌教授、私が商学部長で、この3人がチームを組んで執行部の対外関係の仕事を担当することになった。そのため3人で文部省や如水会に出かけるなど行動を共にする機会が多かった。

森田氏は同じ会計学専攻の仲間であり、学生時代から付き合い合っている。しかし津田さんは顔を知っている程度で、私が執行部のメンバーになるまでは一度も話をしたことはなかった。

ある日のこと、津田さんから「センター」が全国の大学図書館の職員を対象にして開く講習会で会計学関係の話をしてくれないかと頼まれた。会計学関係はまだ一度も取り上げたことがないとのことであった。

私も歴史に無関心というわけではないが、興味があるのは19世紀の半ば以降なので、「センター」がいう古典の枠には入らない。そこでお断わりしたのであるが、結局は引受ける羽目になり、「簿記・会計学の古典」という題で2時間しゃべった。1987年11月19日のことである。

受講者のために講義資料を作って欲しいとのことで、取り上げる簿記・会計学の古典のリストを渡した。あとでみると他の講師の講義資料に比べ、私のは全くぶっきらぼうなものであった。

講習会の会場は「センター」の一隅であった。受講者は30名ほど。古賀さんが私を紹介したあと一番うしろの席に坐って最後まで付き合い下さった。話を始めようとしたら、どなたも緊張して硬い表情だったので、私はまず次のようにいった。

「皆さんは恐らく簿記とか会計学を専門に勉強しておられないでしょうから、ごく基礎的なことから話します。そのためにお配りしてある資料の全部について説明できないかも知れませんが、そう欲ばることもないので時間がきたら打ち切りますけど、どうぞ勘弁して下さい。」

受講者の中には私をずいぶん無責任な講師だと思った人がいたに違いない。しかし会場の空気はやわらいだ。

驚いたことに事務局が気をきかして、私がリストに挙げた書物の大部分を会場に持ってきてく

れた。そのため私は現物を手にしながら説明することができた。これは解説する者にとっては最高の小道具であった。

簿記・会計学の古典といえば最初に出てくるのが有名なルカ・パチオリの「スムマ」(Luca Pacioli, Summa de Arithmetica, Geometria, Proportioni et Proportionalita, Venezia, 1494)である。この数学書の中で当時ヴェネツィア地方の商人の間で行われていた複式簿記という記帳法が説かれたのである。これは世界で最初の簿記書とされている。

この書物は1494年に初版が、そして1523年に第2版が出ている。いずれも世界の稀こう本で、初版はわが国に3冊しかないと聞いている。某大学図書館はこの本の初版と第2版を1冊ずつ持っているそうであるが、私は確認していない。一橋は初版も第2版も持っていない。

実は10年ほど前に、この書物の初版が売りに出され、一橋にも内々に話があったのであるが、関係者が相談したうえで買わないことに決めた。私も買わなくてよいという意見を述べた。その理由は、①値段がべらぼうに高いこと、②せっかく買っても古いイタリア語で書かれたこの書物を読む人は将来も出てこないと思われること、③この書物のこの部分については英訳、独訳、仏訳があって、原著がなくても困らないこと、である。

古典資料を愛する人からは、なんと情ないことをいうやつだと軽蔑されるに違いない。稀こう本は、それを持っているだけで心が豊かになるものだとどこかで聞いたことがある。私もその気が全くわからないわけではないが、結論は変わらない。

パチオリの複式簿記は、その後の商業の発達に伴ってヨーロッパの諸国へ広がっていった。それを示すものとして次のような文献が挙げられている(重要なもののみ)。

Johan Gottlieb, Ein Teutsch verständig Buchhalten für Herren oder Gesellschafter, Nürnberg, 1531.

Jan Ympyn Christoffels, Nieuwe Instructie, Antwerp, 1543.

Hugh Oldcastle, A Profitable Treatyce, London, 1543.

John Weddington, A Breffe Instruction, London, 1567.

Simon Stevin, Verechting van Domeinen en de Vorstelyke Boeckhouding, Amsterdam, 1604.

これらはいずれも1850年以前に刊行されたものであるから、わが「センター」に収蔵されていてもおかしくないのであるが、1冊もない。それは過去において一橋には簿記会計史に関心を持った教官がいなかったからであろう。

簿記とか会計学は、もともと実用的な学科のせい、歴史的な研究をする人は非常に少ない。これはわが国だけでなく、世界的にそうである。経営史(business history)が注目されるようになったのに比べ、会計史(accounting history)は依然として低調である。

私と「センター」にかかわる出来事がもう一つある。それは1988年9月5日、本学を訪問されたアントワープ大学応用経済学部の学部長 E. Vanlommel 氏とごいっしょに「センター」の書庫を見せてもらったことである。

V 氏と私との間には、その約1年前から手紙の往復があった。それは先方がわが商学部と学術交流協定を結びたいと言ってきたからである。その橋渡しをしたのは、そのころ如水会ブリュッセル支部長をしていた中村重之氏(昭和29年法学部卒、丸紅)であった。

アントワープ大学応用経済学部の前身はアントワープ高等商業学校で、明治時代には一橋の出身者も留学したほどの名門校であった（留学生の中には村瀬春雄、関一、石川文吾の諸氏がいた）。またアントワープ高商出身のブロックホイス氏が明治25年から昭和5年までの38年間にわたり一橋で「貿易実務」を教えた。V氏は、これらの古いつながりを強調するのである。

交流協定の内容等については書簡の往復により大体のメドがついた。そこでV氏の本学訪問となった。こちらは国際主幹、フランス・ベルギー委員会の古賀英三郎委員長と私の3人が応待した。

ささやかな昼食をすませ、図書館の閲覧室にあるブロックホイス氏の胸像の前で記念撮影をしたあと、「センター」の書庫を見学した。これは古賀さんがいたからなのか、それとも外国からの賓客にはここをお見せするのが決まりになっているのか知らない（わが大学にはほかにお見せするものはなさそうであるが）。

「センター」の奥田氏が案内してくれて、ベルギーで出版された古い書物などV氏の喜びそうなものを含めていろいろ見せてくれた。V氏はすっかり感心して、何度か感嘆の声をあげた。私もメンガー文庫やギールケ文庫を実際に見たのは初めてであった。

「センター」の蔵書数は約7万冊、社会科学古典の宝庫というにふさわしい。しかし残念ながら私には全く関係がない。猫に小判とは、まさにこのことである。

（一橋大学商学部教授）